

2. 寄稿：「何でも見てやろう(小田実著)」に啓発され片道切符で海外に飛び立った男 山田廣信 (株Cosmo Link 取締役)

1948年10月新潟県新発田市(城下町)に生まれる。

戦前、御用商人として上海に渡り、燃料商を営んだ祖父から上海時代の栄光の思い出話を幼い頃から聞かされ、「若者は海外に羽ばたけ！」と叱咤激励されて育つ。

やがて中学高学年になったころ、新発田城の近くにはルーテル教会があり、米国人宣教師夫人が英会話を教えていると知り、教室に通う。

教会で英語の絵本を貸し出しており、初めて嗅ぐ西洋特有の香り、またクリスマスには自宅に招かれ、夫人手作りの初めて味わうクリスマス料理に西洋の豊かさ文化を感じ、海外への憧れがますます膨らんでいく。

大学時代、「何でも見てやろう(小田実著)」を読み、海外留学を本気で目指すようになり(すでに就職の内定も得ていたが)、留学の可能性を探る。

- ① 第一目標は米国留学(コーネル大学)
- ② 第二目標は仏国(グルノーブル大学)

しかし、米国留学は多額の授業料がかかり、父に相談するも即座に却下!

一方、仏国留学はバカロレア取得者であれば比較的容易に入ることが出来、費用(授業料・食費)もかなり安いことが分かる。

早速滞在費用の一部を負担してくれそうなスポンサー探しを開始。

当時スキー同好会で競技スキーに励んでおり、たまたま先輩がスキー用具の輸入商社の役員をしておりダメもとで相談してみる。

同社は当時グルノーブル冬季オリンピック三冠王ジャンクロード・キリーが使用するスキー靴の輸入代理店で留学するなら仏国の連絡員として契約してもよいとのこと。そこで留学先をイゼール県にあるグルノーブル大学に定め application を提出、内定通知を受取る。

1972年春卒業後、就職先の内定を丁重にお断りし片道切符で渡仏。

初めての渡航も格安料金のソ連航空アエロフロートに乗り真夜中、パリの空港に到着。相乗りタクシーでホテルにたどり着くも真夜中。隣室から白装束の老婆に羽交い絞めに会う(実際は緊張から金縛りであった)。

グルノーブル大学では文学部に所属し、仏語習得の傍ら、スキー倶楽部にも所属。

夏はテニスとスキーの陸トレ、冬はスキー部主催のスキー合宿・ツアーに参加、仏国国内の殆どのスキー場を訪問。春にはモンブラン中腹のエグイデミディ(標高約4km)から約20kmの氷河を滑走。途中クレパスに落ちそうになるなど今思えば無謀ともいえる経験。

その間、契約先には欧州スキー業界の近況にレポートを定期的に提出、僅かながらの収入を得る。

1 年余滞在したころ、国際人となるには先ずは英語の習得が不可欠と思い、留学先を英国に移動。英国で年末を迎える頃、某日本商社が仏語のできる人材を探していることを知り急遽帰国。

採用試験を受け、大学院卒扱いで採用となり 1974 年 4 月商社マンとしてスタート。

配属は繊維部門で、ゆくゆくパリ駐在と思いきや想定外の「鉄鋼貿易！」最初の駐在地は仏語圏の「ここは地の果てアルジェリア！」、4 年半家族帯同で二度と体験できないような異文化に触れる。（仏蘭西映画：ジャンギャバン主演の「望郷」の世界）



アルジェリア駐在員砂漠旅行

アルジェリア内陸工場訪問

帰国後 2 年足らずで米国ジョージア州アトランタ駐在を拝命！

米国留学の夢を果たすと同時に家族ともども 6 年半の米国生活を満喫。



伊藤忠アトランタオフィス



コロラドデンバー
スキー旅行

米国から帰国するにあたり、留学含め約 13 年の海外生活に孤独感と家族の将来も考え、国内勤務への移動を申し入れ受け入れて貰う。

国内勤務は海外生活とのギャップ（カルチャーショック）が思いのほか大きく、家族共々苦労したが海外留学を試みたチャレンジ精神は国内勤務でも衰えることなく新規分野の開発業務を中心に邁進。子会社・関連会社・外資等を経て今日に至る。

これまでの人生を振り返ってみると無謀とも思える海外留学経験のお陰で独立心を養い、妥協の無い人生を送る一方、協調性に欠ける自分勝手な人生ではなかったかと反省もある。

今は、これまでの海外・国内の経験を地元の発展に少しでも役立てればと「みなと横浜改造市民会議」で活動中。